

ライプニッツ哲學の意義

田邊元

此一篇は西田教授の『意識とは何を意味するか』(『哲學研究』第廿二號)及び『ライプニッツの本體的證明』(『藝文』第九年第一號)なる二論文に述べられた所を指針としてライプニッツの著作を読み、其思想の我々に對する意味に就いて感じた結果を録したるものである。ライプニッツの著作といふも余の讀んだのは僅に Duncun 英譯の *Philosophical Works of Leibnitz*(之を引くに D を以てする)と Montgomery の譯した *Discourse on Metaphysics* 等(之を引くに M を以てする)の二つに止まるのであるから固より博引旁證精細なるライプニッツ研究に伍せんとすることは思ひも寄らない。其上ライプニッツの説に就いて考へた所も西田教授の思想に負ふ所以外幼稚未熟にして大方の瀏覽に供すべきものは始ど無いのである。寧ろ余は唯自分の理解を深める爲めの演習として之を書いて見たまでに過ぎない。此の如きものを以て讀者を煩はす余の罪に對しては切に寛恕を乞ふ次第である。

ライプニッツは『形而上學講説』廿四、廿五に於いて精神を書寫用白紙に比せんとする

アリストテレスの見解に反對し、外來の感覺を以て精神に本來具有せらるゝ觀念の想起を促す所の緣由に過ぎずとするプラトインの想起説を賛して其深邃なる思想を稱へて居る。若し精神が今日思惟し認識する所を往者已に思惟し認識せることあるものなりとする精神先在説の誤謬を去るならば、此プラトインの想起説は大なる眞理を含むとはライブニッツの言ふ所である。彼に従へば觀念は現に思惟せらるゝと否とに拘らず精神に存する。是れ現に思惟せらるゝ限りに於てのみ存する。〇neipusと異なる所である。其觀念に基き其關係として成立する所の眞理も亦現に認識せらるゝと否とに拘らず精神は之を所有するのであるといふ。斯様にライブニッツが觀念と眞理とを人の現に之を思惟し認識する作用を離れて存在するものであると考へたことは、古のプラトインより近時の先驗的論理主義に到る媒介を成すものであつて、ラッセル、クローテニラーの如き論理主義者が其思想の源流を此處に汲むのも偶然のことではない(此處に論理主義といふのは主知主義といひ唯理主義といふのとは違ふ。主知主義は一切現實を認識の理論的價値のみに歸せんとし、唯理主義は更に其理論的價値を思惟の論理的形式のみに還元せんとするものである。然るに論理主義といふのは唯一切現實を意識の作用と獨立なる絶對價値の體系即ち意味

の統一に歸する立場をいふに外ならなす。(Münch, Erlebnis und Geltung, S.107)に此三者の別を明快に説いて居る。)ホルツァーノが其眞理自體の説の先蹤としてライプニッツをも擧げ得ることを特に注意したのは正當である(Bolzano, Wissenschaftslehre, S. 120-121.)併しながら觀念や其關係としての眞理が精神に本來具有せられるといふのは如何なる意味に於て可能であらうか。ライプニッツは其巧妙なる無意識的極微知覺の概念を以て之を解釋し得るものと信じ、觀念や眞理は現に意識せられざるも極微知覺として精神に存在すると考へたのであらう。併しこれは觀念本有の問題を意識の範圍から無意識の範圍に推移したに止まり、觀念が現に思惟せられると否とに拘らず存在するといふことの可能を眞に理解せしめるものではない。若し觀念が精神に本來具有せられるといふのが極微知覺として存するといふ意味に止まるならば、觀念は縦ひ無意識的にせよ思惟作用を俟つて成立するのであつて、之を離れて存するといふことは云はれない。此點に於てライプニッツの觀念本有説はプラトンの想起説と同じく猶純粹の論理主義に達せざる形而上學的的心理説たることを免れないのである。之を純化して、形而上學的假定を離れ論理主義を徹底せんとする爲には、ロツツニ以來重要なるものとなつた妥當の概念により、觀念の本來具有を意味の先驗

的妥當と轉釋しなければならぬ。觀念が本來精神に具有せられるとは意識的にも無意識的にもそれが思惟せられて居るといふことであつてはならぬ。ナトルプは其プラトーン研究に基いてプラトーンのイデヤが形而上的存在を有するものでなく、其存在は論理的被定立の意に外ならず精神先在説と觀念想起説とは唯此論理説に關聯して當時の神話的形而上學に基き主張せられた心理的解釋に止まり、逆に之を以て其論理説を基礎附けせんとするものにあらざることを力説し(Natorp, *Über Platon* Ideall. I. S. 20-23) ライプニッツが承認した想起説をも其排せる先在説と共に斥けた(29)。斯かる解釋が、果して、哲學史上充分の根據を有するものかどうかは余の今判定し得る所ではないが、とにかく論理主義を徹底すれば此處に至らなければならぬことは疑も無い所であつて、ライプニッツが猶プラトーンの想起説を賛して觀念の本來具有を説いたのは未だ其説の純粹ならざることを示すものといはなければならぬ。余が曩に彼れをプラトーンと近時の論理主義との媒介者たる中間段階に立つものと云つたのも之が爲めである。觀念は本來精神に具有せらるゝとして之を精神と共に永久の存在を有するものと見るも、猶其は時間的存在の攀籠を脱するところが出來ぬ。眞の超時間的存在は唯妥當する意味としてのみ可能である。觀念本

有説は此先驗的妥當説に轉釋せられることに由つてのみ不朽の生命を維持することが出来るであらう(錦田學士が本誌第廿七號に於てライプニツの觀念本有説を眞理の可思惟といふ要求に基くものと解して、論理主義の立場から此説を輕視するのに反對せられた詳細なる説論には、余は學士の常に公にせらるゝ他の精到なる研究に對すると同様の敬意を有するものである。併し余は今學士の如く哲學史の立場からライプニツの思想の由來を探らんとするものでなく、批評的に其思想の我々に對する意味を知らんと欲するものであるから、上の如き論理主義的の解釋も亦是認せられることと信ずる)。

然らば右の如き意味に於て本來精神に具有せられる觀念は如何なるものであらうか。ライプニツは人の知る如くロウクの *Nihil est in intellectu quod non fuerit in sensu* といふ主張を許容しつつ、唯之に *nisi ipse intellectus* を加へて、一方に於ては凡ての觀念が思惟せられる爲めに感覺が緣由を必要としながら、他方に於ては凡ての純粹分明なる觀念が本來感覺と獨立に存することを主張し、其等に關係する知性の感覺に俟つ所無きとを説いた(*New Essay on Human Understanding Book II, Chap. I, §. 23, 25, D. p. 208*)。其本來精神に具有せられることを信じたのは神實體の概念より論理、數理及經驗の範疇

となる如き諸概念に限り、感覺其物の本質(フッサールの意味に於ける Wesen)を表はす概念に及ばないことは明である。彼がデカルトやスピノザと同じく物體の感覺的屬性を以て混亂せる觀念に屬するものとし、之を分明に適當に分解すればデカルトやスピノザの説く如き延長ならざる、力を本質とする實體の複合に歸することを主張したのは唯理論の必然の歸結である。併しながら此様な考へ方は寧ろ自然科学的概念構成の一面のみに偏せる近世唯理論の僻見であつて、カントの先驗論の如きも亦此餘弊を脱却することが出来なかつたことは否定し得ない。現代の新カント派に至つても猶思惟に基く認識の形式を説くに於て殆ど詳細至らざる所無きに拘らず、感覺的實質の意味を解することに於て不完全なるを免れず、終に架空の形式論に陥らんとする傾向あるも亦非合理的なる感覺の本質を閑却した結果であらう。此點から見て同じく論理主義を採りつゝも學說を異にするフッサールが感覺の本質を認め、思惟以外の作用性を説くのは卓見といはなければならぬ。ライプニッツの觀念が其先驗的妥當の説をして充分の意義を發揮せしむるには、元來有する所の其獨斷的なる制限を脱して廣くフッサールの本質を表はすものとならなければならぬ。譬に合理的なる論理的先驗概念のみならず、非合理的なる感覺の本質を表はすもの

を先驗的妥當の觀念として認めるに至つて始めて、後に説く如き其哲學の最も重要な意義を發揚すると思ふ。成程感覺は論理的に分明を缺くことライブニツのいふ如くであるけれども (Eidos) 其本質を表はす觀念は亦現に感覺せられると否とに拘らず妥當する先驗的の意味を有するものである。例へば心理學者が色の感覺の關係を表はすものとして考へる *Erlebnis* の如きも、其表はす所の關係は現に感覺せられると否とに拘らず妥當する種々の色其物即ち本質としての色の相互關係に外ならない。之をエーテル振動數の關係等に由つて説明するのは自然科学的の解釋であつて、其眞に表はす所の關係は直接體驗せられる所の感覺の本質に關するもの個々の現實的に意識せられた感覺は此本質の基礎に由つて成立すること他の先驗的なる觀念に於けると同様である。フッサールが其 *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, I* の初に説いた様に、個々の經驗事實は何れも必然普遍の本質を含み、此は前者を離れて先驗的に存立するのであつて、事實が *Existenz* を有するに對し本質は *Essenz* を有するのである (Husserl, *Ideen* &c., S. 12)。⁹ フッサールは此本質を呼ぶにプラトンの觀念 (*Eidos*) を以てした (S. 6, 9 &c.)。是れ正にライブニツの觀念が其自身可能なるものとして *Essence* を有するといふに一致するの

であつて、ライプニッツの觀念はフッサールの本質としての感覺をも含み、其本質的關係を觀念の關係としての先驗的眞理と承認するに至らなければならぬ。固より斯かることはライプニッツ本來の唯理論的形而上學と兩立し難き所であるけれども、其一时的なる特殊の臆見を離れて、不朽の意味を有する思想を充分に發揚せんが爲めには斯かる擴張を必要とするのである。觀念が現に思惟せられると否とに拘らず、本來精神に具有せられるといふライプニッツの説は、凡ての本質を表はす概念が其意識せらるゝ作用と獨立に先驗的の妥當性を有するといふ意味に於て永遠の生命を維持することが出来る。後に説く所のライプニッツの事實の眞理、現實的事實の存在に關する思想も之に由つて始めて其深き意味を充分に發揮することが出来るのである。フッサールは其純粹論理學の思想を以て、比較的最もライプニッツの説に近きものと言明したが(Husserl, *Logische Untersuchungen*, I, S. 219)宛もフッサールの論理學が終に廣く純粹現象學の建設を促した如く、ライプニッツの思想も純粹本質論或は對象論に擴張せらるべき筈のものであると考へることも出来るであらう。斯く見れば現今の獨逸派はライプニッツを先蹤とし、新カント派の純粹論理學に於てカントの先驗論が純化徹底せられた如く、獨逸派の純粹論理學、純粹現象學或は對象論に於てライプニ

ツの觀念本有説が純化發展せられたと云つても差闕あるまい。

二

ライプニッツが前節に述べた如く觀念の本來精神に具有せられるものであつて、其關係としての眞理が初より精神の保有する所なることを主張する以上、斯かる眞理の認識を以て觀念の分析に歸し、命題を以て主部たる觀念の本質中に發見せられる賓部たる觀念を前者に結合するもの、従つて一般には主部たる觀念の本質を陳述する定義より演繹せられるものと解したのは自然のことである。併しながら彼が眞理に二種を認め、所謂永久眞理なるものは神の悟性に屬するものであつて、其反對が矛盾を含む必然的のものなることを主張しつゝも、他の種類の所謂事實眞理なるものは必然的ならず偶然的にして神の自由なる意志に基くものなることを説いたのは、其動機に於て彼の思想の深きことを示すと同時に、其結果に於て觀念本有説の正當なる解釋を再び困難に陥らしむるものといはなければならぬ。ライプニッツは『形而上學講説』十三に於て、シーザーの一生の行動も初よりシーザーなる觀念の本質中に含まるゝ賓部に表はす所として、該觀念の分析に由り全く先驗的に豫知せらるべ

き筈のものであると主張し唯斯かる主部賓部の結合が完全を求むる神の自由意志に由つて生ずるものであつて、其反對も不可能ならざるが故に必然的にあらずして偶然的なることを説くのであるが(M. p. 20-22)成程觀念がライブニッツの考へる如く潜在的に精神に本來具有せられるとするならば、其が神の意志に従つて結合せられる凡ての賓部を其主部たる觀念の中に初より含蓄することも出来るであらう。併しながら若しも觀念本有説の意味が前節に述べた如く唯本質を表はす觀念の、其が意識せられる作用と獨立の意味を有するといふことに止まらなければならぬとするならば、偶然的なる事實眞理の賓部を主部たる觀念の分析に由つて先驗的に知ることが出来るといふのは不可能とならなければならぬ。觀念の本有を如何なる意味に於ても事實の世界から離れたものとし、之を純粹本質の世界に屬するものと解する限り、其認識の關する所は *Essenz* に止まりて *Existenz* に及ぶことは出来ぬ。本質は必然性普遍性を有するものなるが故に、其認識は先驗的でなければならぬけれども、偶然的特殊なる事實の存在は先驗的に認識することは出来ぬ。ライブニッツの考では後に説く如く事實を以て可能なる本質的關係の同時共立に歸するのであるが種々の本質關係の如何に結合せられて事實となるかは神の自由なる意志に

依るものたる以上之を先驗的に知るべき道は無いといはなければならぬ。成程神の自由なる意志も最勝律に従ふ *inclining reason* を有するものであつて、事實の眞理も充足理由原理の支配を受けるのではあるけれども、併し有限數なる可能の結合から最良完全なるものを選択するものならば其現實となる事實を先驗的に知ることが出来るけれども、其可能なる結合の數が無限に多くある場合に如何にして其中の最も勝れるものを豫め知ることが出来るやうか。如何なる事實が神の完全を求める要求に由つて生ずるかは事實の生じた後に後天的に知られるのみであつて先天的に知り得る所ではない。個體の未來に亘る一切の行動を其觀念の本質分析に由つて豫知することが出来るといふのは、觀念本有説の形而上學的心理説を離れた純粹論理主義的の解釋の是認する能はざる所である。ライブニッツが必然的なる永久眞理の外に偶然的なる事實眞理を認めて、個體の非合理的なる存在を救ひ、スピノザの自然主義的汎神論を免れんとしたことは其思想の深さを示すものであるけれども、事實眞理をも永久眞理と同様に觀念の分析に由つて先驗的に認識せられるものと考へたことは、唯理論の餘弊を脱却し得なかつた結果であるといはなければならぬ。ライブニッツ自身が認めたやうに事實眞理は永久眞理を豫想して始めて可能となる

ものであるから、兩者を同列に考へることは出来ない筈である。實は其觀念分析に由る先驗的認識の對象たるものは永久真理のみに限られるのである。ライブニッツが『形而上學講説』の摘要を示して批評を求めたアールが先づ第一に其摘要の第十三に挙げられた、個人の觀念が其人に起るべき未來の出來事一切を時の順序までも定めて其中に含蓄するといふ主張に注目し、其が神の自由を破壊するものであるといふ理由の下に之に反對して(M. p. 69-73)兩者の論争辯難が先づ最初此問題から端を開いたのも偶然ではない。ライブニッツが之に對して自説の宿命論にあらず、神の自由を破壊するものにあらざる所以を辯じた細密なる議論は彼の優秀なる思考力を示す最も重要なものであるけれども、之を其儘承認して前記の主張を維持することは純粹論理主義の立場からは許されない。

今述べたやうな譯で我々が今日觀念本有の論理主義的解釋から其に關する認識の先驗性を認め得るのは所謂永久真理のみに限る。此場合我々が前節に述べた所の感覺の本質を表はすものをも其所謂觀念に包含せしめることは勿論である。偕此様な觀念に關する永久真理が先驗的に認識せられるものなることは、一方に於て新カント派の先驗論理論と、他方に於て獨逸派の純粹本質論、對象論の確立せられた

今日更に細論する必要は無いであらう。問題は唯ライブニッツが凡ての永久真理を以て矛盾律に支配せられる自同命題とし(D, p. 313)之を主部たる觀念の分析に由つて認識せられるものとする説が果して正當であるかどうかといふ點にのみ存する。彼は『モナド論』卅三—卅五に於て永久真理即ち推理の真理は其反對が矛盾を含む必然的のものであつて、其真理の理由は之を定義すべからざる單純なる觀念と、證明すべからざる第一原理とに分析することに由つて發見せらるゝもの、其所謂第一原理なるものが反對は直ちに矛盾たる自同命題たるに由つて、之より演繹せられる命題が必然的真理となるのであると説く(D, p. 313)。併しながら永久真理が若し單なる同語反覆に止まらざるものであるとするならば、假令其が第一原理より演繹せられ、其賓部が主部たる觀念の分析に由つて發見せられるとしても、其主部たる觀念其物は單純なる内容を有するものでなく、複雑なるものの統一たる概念でなければならず、所謂第一原理たる公理は此概念の綜合的生成を規定する原理たるのでなければならぬ。若し然らずして第一原理が單なる自同命題であり、此が凡ての演繹の前提たるものであるならば、實は複雑なる觀念の生成も理解すべからざることとなり、凡ての永久真理は畢竟空なる同語反覆に歸さなければならなくなる。複雑なる觀念

は分析すれば最後には定義すべからざる單純觀念に到達しなければならぬけれども其等の單純觀念の複合が第一原理の規定に従つて統一せられて複雑なる觀念が生ずるから之を分析して必然的の永久眞理が得られるのである。所謂第一原理なるものは觀念の綜合を規定するものでなければ之から同語反覆ならぬ永久眞理が演繹せられるとは出來る筈が無い。即ち第一原理はライブニツツが考へる如く單なる自同命題でなくて綜合の命題でなければならぬ。若し永久眞理なるものを最も根本的なる眞理のみに還元して第一原理のみを考へるならば永久眞理は先驗的綜合の根本原理に外ならない。而して實はライブニツツが單純觀念とする空間、形狀、運動、靜止の如き觀念が(D. p. 205)何れも更に之を分析すれば空間、點、時間、點、相等、對應等といふ如き眞に單純なる觀念の綜合統一に由つて成立するものなのであつて、其綜合を規定する根本原理が所謂第一原理として存するのである。ライブニツツが永久眞理は矛盾律に由つて主部たる觀念を分析するとにより賓部を發見するとの出來る必然の眞理であると主張するのは正當であるけれども、同語反覆ならぬ眞に知識の擴張を爲す眞理が得られる爲には、單なる自同命題ならぬ綜合の原理が所謂第一原理として前提に承認せられて居るのでなければならぬ。約言すればカントの

綜合の概念を以て之を補ふのでなければライプニッツの永久眞理先驗的認識の説は重要なる意味を有することは出来なくなるであらう。算術、幾何學の眞理が永久眞理たることは勿論ライプニッツの認めた所であつて(D. p. 197-198) 其等の眞理が凡て論理の概念を以て成る定義と公理とから演繹せられるといふ思想は、ペアノ、フレゲからラッセル、グーテラーに至つて大成した今日の數學的論理派の先蹤となるものであるが、其定義に含まれて其自らは定義せられざる根本概念は公理に由つて其綜合構成の論理的過程が規定せられるのでなければならぬことは、新カント派のナトルプ等が現代の數學的論理派に對して批評解明した如くである(Natorp, Die logischen Grundlagen der exakten Wissenschaften, S. 3-11)° カント已に「數學者の推論が凡て矛盾律に由る爲めに(此は凡ての必然的確實の本性上要求せられる所である) Grundätze 其物も矛盾律に由つて論證せられると考へるのは誤である、綜合命題が實際矛盾律に由つて認められることはあるけれども、其は唯他の綜合命題が豫想せられ、其から推論せられるからであつて、其自身矛盾律により認められるのではない」と云つて居る(Kant, Prolegomena, Reclams Ausgabe, S. 43)° 我々は之を擴張して凡ての永久眞理がライプニッツの考ふる如く單に矛盾律に由つて成立するものでなく、所謂第一原理は矛盾

律に由つて保證せらるゝ、自同命題ならざる綜合の命題なることを主張しなければならぬ。カントの偉業は實に此綜合の可能を確立したことに存するライブニッツの永久真理の説はカントの綜合の概念に由つてのみ豊富なる内容を得ることが出来るのである。斯く考へるとライブニッツが永久真理の主部として其本質の分析に由り賓部が発見せられるといふ精神に本來具有せられる觀念は何れも關係概念でなければならぬことが知られる。而して關係概念の先驗的なるものは即ち諸々の對象界構成のアプリオリに外ならぬ。於此第一原理としての永久真理は畢竟諸種のアプリオリの内容を表はすものであつて、其主部たる觀念は其等のアプリオリを意味する先驗關係概念でなければならぬことが知られる。論理のアプリオリより感覺のアプリオリに至るまで、凡て夫々の對象界を構成する本質的關係の概念たるものが先驗的妥當の意味を有する本有觀念となり、其概念の内容たるアプリオリが永久真理として先驗的に認識せられるのである。斯く解することに由つてライブニッツの本有觀念説はカントのコペルニクスの偉業に參して現代的の意味を有するものとなることが出来る。

三

ライブニッツは永久眞理が其反對の矛盾なるに由り必然なることを説くのであるが、今述べた如く永久眞理が單なる自同命題に歸すること能はず、其が綜合を表はすものであるとするならば、其所謂必然は單に自同律矛盾律に基くものでなくして、綜合の本質的關係に基くものでなければならぬ。換言すれば形式論理的必然でなくして先驗論理的必然乃至對象論的必然でなければならぬ。併しながら此様な必然の永久眞理は關係概念に關するものであるから、其は關係の或項の定立は他の項の定立を必然的に要求すると主張するのみであつて、或特殊の項其物の定立を絶對的に要求することはない。即ち假言的必然であつて、絶對的必然ではあり得ない。ライブニッツは事實眞理が神の自由選擇に基く限り *necessary ex hypothesis* なるに對し、永久眞理が凡て幾何學の眞理の如く反對の矛盾を含む絶對必然なることを説いて居るが (M., p. 20) 併し其絶對必然といふのは反對が思惟せられぬといふ意味に止まり、直ちに對象の實在を主張するのではないから、余の所謂假言的必然といふのに矛盾するものではない。却て永久眞理も實は自同律矛盾律のみに由つて成立せざる綜

合命題なることを認めるならば、同時に其假言的必然に止まることを承認しなければならなくなる。之に對し事實眞理は曩に述べた如く意志の當爲に基く自由選擇の結果として *Sollen* を含むけれども *Müssen* 即ち必然といふことは出來ないと思ふ。

ライブニッツ自身も現に『悟性新論』第十一章に於て、永久眞理に關しては彼等が根柢に於ては凡て條件的なる、即ち某々のものが定立せられれば他の某々のものが定立せられなければならぬといふことを陳述するものなるを注意しなければならぬと云つて居る(D. I. 246)。永久眞理は觀念の本質に關し、其アプリアリの内面的必然關係を假言的に表はすものである。其故此は其對象の可能を示すけれども其現實的存在を主張することは出來なす(M. p. 106, 113)。ライブニッツのいふ如く空間は「常に存在する物のみならず可能的なる物の秩序なのである」(D. p. 214)。其觀念のみにより現實なる個物の存在を主張することが許されないのも之が爲である(M. p. 106)。球の觀念は球の本質を教へるけれども特殊の球の存在を完全に規定するものではないのである。従つて其意味に於て其は不完全にして抽象的であるともいはれる(M. p. 106)。觀念は一般に特殊現實の對象を表はすものでなくして、普遍的なる本質の關係を表はすものであつて、可能なる無限に多くの個的存在を包攝し得る類概念に外な

らぬ。即ちフッサールの所謂 *Wesensallgemeinheit* (Husserl, *Ideen* &c., S. 14) を表はす觀念がそれである。ライブニッツが *Sub ratione possibilitatis* (M., p. 109) と *Sub ratione generalitatis* (M., p. 111) というのは此様な本質的普遍の立場に於て物を考へることを指すのである。斯かる類概念は固より先驗的に本質を表はすのであるから、個々の特殊觀念から抽象せられて成立するものではない、却て個々の特殊觀念に先だつて其成立に豫想せられるものである。ライブニッツは單に個々の經驗を如何に多く集積するも普遍の眞理に達する能はず、此は唯理性に由る必然眞理としてのみ可能なることを説いて歸納の根據に關し銳利なる批評を下したが (D., p. 199) 眞の歸納は實に斯かる先驗的普遍の概念に由つてのみ可能となるのである。併しながら斯かる本質的普遍の觀念は其自身では可能的對象、*マインノング*の所謂 *Objektiv* を表はすに止まるから、之に由つて成立する永久眞理の體系は廣義に於ける本質學を形成することが出来るばかりであつて、事實學を形造ることは出来ない。數學は斯かる本質學の代表的なるものであつて、今日其特色が假言的論證の體系として適切に言表はされて居るのも其が所謂永久眞理の體系だからである。前に擧げた、普通には經驗的事實の法則と考へられて居る心理學者の *Farbenregel* に由つて表はさんとする色覺の諸關係の如

さも實は感覺の本質的關係に就いての永久眞理を表はすものとして單に可能的なる先驗眞理に止まると解せられる。

右の如く永久眞理の表はす所が本質の必然的關係に、止まり、其自身では可能なる普遍的對象を規定するのみであつて、現實に存在する個々の對象を規定する能はざるものであるとするならば、此後の目的を果すものは何であらうか。其は即ち所謂事實眞理である。事實眞理は個々の對象の存在を規定するものに外ならない。存在といふのは種々の可能なる關係系列の共存的統一である。夫々のアプリオリに關する永久眞理は各々其範圍に於て假言的必然の關係系統を形造るけれどもそれだけでは事實の存在を規定するとは出來ない。空間の關係は幾何學に由つて必然的に規定せられるけれども幾何學の對象としての空間は本質としての空間であつて現實の空間ではない。現實なる經驗的個物の世界は斯かる本質としての空間の外に、同じく本質としての時間、本質としての感覺のアプリオリの系列の共存的統一といふことに由つて始めて成立するのである。可能なるアプリオリの系列の無限なる結合の中から選ばれたる或一つが現實に存在する事實の世界を構成するのである(D., p. 107; M., p. 109)。而して斯かるアプリオリの永久眞理を共立の關係に於て統

一するものはライブニツに據れば神の意志である。無限に多くの永久眞理は凡て神の知性に存するのであるが、其等の無限に多くの可能なる系列の無限に多くの仕方にて可能なる結合の中から神が其自由の意志に由つて選擇した共存的結合が即ち現實的事實の存在である。此は其反對たる他の仕方に於ける永久眞理の結合を矛盾ならしむる如き必然性を有するものではなくして偶然的である。ライニツはア・ノールへの書翰に於て神が無限に多くの可能なる世界の中から其自由なる決意に由つて現實の世界を創造したのであつて縱永久眞理がデカルト派の考へる如く神の自由意志に支配せられざる必然的のものなるも現實的個物の存在世界は神の自由意志に依存するものなることを繰返へし詳説して居る。併しながら現實的存在の世界が神の意志に依存するといふことは其成立が無理由であるといふのではない。如何なるものも其然るべき充分の理由あるにあらざればあることは出來ぬといふのは充足理由律の要求する所である。矛盾律が永久眞理の原理たる如く充足理由律は偶然的眞理即ち事實の眞理の原理である『モナド論』卅六。神が此現實の世界を存在せしめた其決意にも充分なる理由が無ければならぬ。此理由は矛盾律の場合の如く強制するものではなくして傾動せしむるもの(D, p. 106-107)即

ち其反對をも可能なるものとして許す自由の規範であるけれども、神の意志は兎に角此規範に傾動せしめられて現實の世界を選定するのである。即ち神は fitness といふ目標に由つて最良なる世界を創造する『モナド論』四十六。此處に最良とは普遍的なる、永久眞理に包攝せられる無限に多くの特殊なる關係の無限に多くの仕方に於ける結合の中に就き、出來る限り簡易の仕方に於て出來る限り多くの可能なる關係が實現せられる如き結合の仕方を意味するのである(D., p. 107—108)。之を又完全ともいふ。完全は即ち存在の原理たること宛も可能が本質の原理たる如きものである(D., p. 109)。神の自由なる意志は完全の原理に由つて其選擇を指導せられて此現實的存在の世界を創造するのである。

今述べた所のライプニッツの現實的存在の世界に關する思想は我々に對して最も深き意味を有するものであつて、今日の批判哲學の立脚地を徹底して終に到達すべき形而上學の立脚地も略之に由つて指示せられると考へることが出來る。曩に余は永久眞理が論理のアプリオリより感覺のアプリオリに至るまで凡てのアプリオリの本質的、普遍的關係を表はすものと解せられるとを述べたが現實の世界は斯かる論理主義的批判論の立場より見ると、正に諸種のアプリオリの一義的特殊の結

合と考へられなければならぬ。本質的普遍は中に無限に多くの特殊を包攝し得るものであるから、其等の諸種が互に結合せられて一定のアプリオリの統一を形造るにも無限に多くの仕方が可能であつて、其如何なる結合が實現せられるかは之を先験的に豫定することは出来ない。現實界の事實が經驗を俟つて始めて知られるのは之が爲めである。カント派の純粹論理主義者は一般に感覺のアプリオリといふ如きものを認めず、之を以て思惟の範疇により合理化せらるゝ限り認識せられる所の認識以前の與件とし、經驗は之を豫想するが故に非合理的にして先験的概念のみにより構成する能はざるものであると考へるのであるが、感覺は論理的思惟に由つて之を先験的に規定することが出来ぬといふ意味に於ては非合理的であるけれども、非合理的なるもの必ずしも直に非先験的ではない。純粹現象學、對象論の立脚地から考へるならば、感覺も其本質が先験的必然の關係を有するものとして知られるのである。従つて其關係は非合理的なるも先験的認識を容るゝものと考へなければならぬ。獨逸派の獨得なる功績の一つは此様な非合理的なる感覺にも、アプリオリを認めたことに存すると思ふ。之に由つて先験的論理主義は始めて完全に徹底せられるのである。而して此徹底せられたる論理主義に對しては、現實的の經驗は

此等諸種のアプリアリの結合統一と解せられなければならぬ。フッサールが事實と本質との關係に就いて説く所も (Husserl Ideen, K. v. S. 31-9) 其外に出でない。然るに斯かるアプリアリの結合統一の仕方は無限に多く可能であるから、其中から如何なる一つが實現せられるかは夫々のアプリアリの先驗的認識からは豫想することが出來ないのである。現實的事實の認識が經驗を俟つて始めて成立するのは其が感覺を豫想するからではない。感覺の認識と雖も其非合理的なるに拘らず Wesenslautheitに於ては先驗的たることが出来るのは疑無きことである。唯此等の凡て先驗的に認識せられる本質的普遍のアプリアリの、一義的限定結合に於て其等が個性的に特殊化せられる仕方が無限に多く可能であつて、其如何なる一つが選定せられるかは如何にするも先驗的の豫想を容れない神秘の領域に屬する所に、斯かるアプリアリの結合としての現實的事實の認識が唯經驗を俟つて始めて成立する所以が存するのである。而して此様な全然理知の豫想を容れないアプリアリの結合は正に絶對自由の意志のはたらきに歸すべきものであつて、經驗的現實の世界は絶對意志の自由選擇に由つて生ずるといふことが出来る。此世界の個々の事實に關する眞理は、諸種のアプリアリを其が特定の結合を成す如くに限定特殊化したものであるか

ら、ライブニッツのいふ如く必然の永久眞理を豫想して成立するのであつて、(D, p. 249) 而も其限定的結合は先驗的必然性を有せざるものであるから、其意味に於てライブニッツの如く之を偶然的といふことが出来るのである。此様に考へると、ライブニッツが此現實的事實存在の世界を永久眞理の表はす可能的なるものの共存的結合として神の自由意志が選定したものであると説くのは、今日の徹底せられたる、論理主義の立場に一致すると解することが出来るのであつて、我々は其深き思想を充分に認めなければならぬ。彼が一方に於てはデカルトに反對して永久眞理が神の意志の左右する能はざる永恒必然の客觀的眞理なることを主張すると同時に、他方スピノザに反對して神の自由意志を認め、永久眞理の限定的結合に於て其はたらきを承認し、以て偶然的個物の可能を基礎附けせんとせる試みは、其神學的形而上學の假定を離れても不朽の意味を有するものといはなければならぬ。併しながら此様な解釋を一層完全ならしむる爲めにはライブニッツに於ける神の觀念を批評して、其が如何なる意味に於て批判哲學の立場から承認せられ得るかを明にしなければならぬと思ふ。次節に此問題を少しく考へて見よう。

ライブニッツは『悟性新論』第四篇第十一章に於て前に述べた如く永久真理が條件的必然の真理なるを説き、其根拠が觀念の結合に存するとを認むると同時に、斯かる觀念の結合を可能ならしむる實在的基礎として至上普遍の精神たる神の存在せざるべからざることを主張し、アウグスティヌスと共に神の知性を永久真理の *region* と見做して居る(D., p. 248—249)。神の知性が永久真理の存在する場所であると云ふ考は已に早くアノノールへの書翰に於ても現れて居るが、此はライブニッツの後に至るまで屢々説く所であつて、『モナッド論』四十三に於ても斯かる永久真理の可能の實在基礎として神の知性を其 *region* と認めなければならぬことを言明して居る。On the ultimate *Origin of Things* の論に於て、永久真理は絶對的形而上的必然なる主體即ち神に於て其存在を有せざるべからず、其に由つて之無しには假想的に止まらんとするものが現實にせられるのであるといふのも(D., p. 109) 同じ意味に外ならない。而して斯かる永久真理の主體としての神は凡ての存在するもののみならず、可能なるもの(永久真理の對象たる)にも亦實在性を賦與するものであるから、必然此等に先だち

此等に優りて實在しなければならぬものであつて (D. p. 110) 實に此は其本質が直ちに存在を含む唯一のものであるとライブニッツは云つて居る『モナド論』四十五 (D. p. 315)。彼がデカルトの本體論的證明を以て不備なりとし、必然なるものが可能ならば其は存在す」といふ思想を以て之を補はなければならぬと考へ、デカルトの證明の中心たる完全者といふ概念も其が可能なる必然者を意味するに由つて始めて其證明に效力を與へ得るとを説いたのも (D. p. 140—146) 神が必然的なるものとして其本質が可能ならば同時に存在を含むと考へたからである。スピノザと會談して論じたといふ「完全なるものは存在す」といふ命題の解釋に於ても、亦専ら完全なるものといふ概念が本質上矛盾を含まず可能なることを示すのに力を集中して居る。積極的、絶對的であつて無限に其對象を表はす凡ての單一なる性質が完全であるが、斯かる性質は分解して考へることが出来ないから従つて其二つを比較して其兩立せざることを證明することは出來ず、さりとて之を分解せずして直覺的に兩立せずと知ることが出来ないから、凡て斯かる完全なる性質は一つの主體に結合せられ、完全なる性質の統一主體としての神が可能である、従つて其は存在しなければならぬといふのが其要旨である (西田教授論文參照)。倅今此思想を神が永久眞理の統一主體で

あるといふ主張と併せ考へて見るならば、永久眞理も所謂完全なるものとして積極的、絶對的であり、無限の對象を表はす單一なる性質でなければならぬのであるが、此は西田教授が解せられた如く、他から限定する能はず、其れ自身に依つて立ち、其種類に於て無限なるアプリオリとして正に此要求に適合するのである。苟も對象化せられたものは已に他に由つて限定せられたものである。他から限定せられない完全なるものは對象化せられざる對象構成のアプリオリ其物でなければならぬ。前に述べた如く永久眞理を對象構成のアプリオリと解するならば、其等は正にライブニツクの所謂完全なるものとして互に矛盾することなく一つの主體に統一せられることが出来るのである。而して斯かるアプリオリの統一主體は凡ての對象的存在の豫想となるものであるから、ライブニツクのいふ如く必然的に存在しなければならぬ。勿論其存在といふのは對象的に存在するといふとではなく、當爲としての存在であるが存在の前に當爲が無ければならず、對象的存在はアプリオリに由つて可能となるのであるから、當爲としての存在は對象としての存在に先だちて之よりも優れるものといはなければならぬ。當爲は己自身に依つて立つ力であるから、ライブニツクの云ふ所に従つて可能が、直ちに實在なのであつて、絶對的に存在し、而して其等

が夫々一つの力として互に他に對して自己を維持するといふことは此等を凡て相關係せしむる統一の主體に於て出来るのであるから、之を結合統一する主體も亦必然存在しなければならぬ。ライブニッツが永久眞理の統一主體とした神は論理主義の立場から當爲として存するアブリオリの統一主體と解して、其存在を主張することが出来る。然らば斯かるアブリオリの統一主體として存在する神は果して如何なるものであらうか。之をライブニッツの如く現實世界を超越して存在する絶對的の實體と考へるならば、其實體としての存在に特定のアブリオリを要するものとなるからアブリオリの統一主體たること能はざるは明である。アブリオリの統一主體たる神は凡てのアブリオリに由る對象的構成を豫想せざる、一切反省に先だつ直接の體驗其物でなければならぬ。體驗に於ては凡てのアブリオリが統一せられ、而して當爲即實在たるに由り體驗は直ちに實在するといはれるのである。ライブニッツ自身が純粹活動 *actus purus* であると云つた神は (D. p. 281) 當爲即實在たる *フヒテ* の純粹事行としての體驗其物でなければならぬ。或は曩に余がライブニッツの觀念本有は個人精神に觀念が無意識的に存在するといふことであつてはならぬ、斯く解するのは觀念本有の問題に伴ふ困難を意識の範圍から無意識の範圍に移動せしめたる

に止まる。徹底せられた論理主義の精神からいへば、唯先驗的に意味として妥當することではなければならぬと言つたのを引いて、永久眞理が神の知性に實在するといふのを純粹事行の意志體験に於て當爲が實在することであると解するのは、再び意味を存在の範圍に引戻し、當爲を事實に由つて基礎附けせんとする心理主義の獨斷論に陥るものではないかといふ疑があるかも知れない。併しながら純粹事行たる體験に於てアプリオリが實在するといふのは、對象としての體験なるものの中に其が實在するといふのではない、當爲即實在として、當爲のアプリオリと其統一たる體験とが同時に實在することを謂ふのである。當爲の前に對象としての存在があると、いふ心理主義の獨斷論に陥るものではない。而して論理主義も、認識の對象を説くのみならず、對象の認識を説き得る爲めには、何等かの點に於て對象と作用、或は當爲と存在とが一つに結合せられる事實を認めなければならぬのであつて、之を論理主義本來の立場に矛盾せざる方法に於て可能ならしむるには、唯當爲即實在たる體験に於てする外無いのである。此様な純粹事行として、アプリオリの統一たる體験がライブニッツの永久眞理の統一主體と考へた神である。若し此様な體験を離れて對象として實在する神を説くならば、其は獨斷的なる形而上學の主張となることを

免れない。對象としての存在は曩に事實眞理に就いて述べたやうに、唯種々のアプリオリの本質的普遍が其結合に由つて對象化せられて個性的に限定せられたとき始めて、可能となるのである。單に當爲として其可能的なる普遍的結合に於て存するアプリオリは此限定的結合に於て始めて現實の對象的存在を構成する。事實眞理は之を表はすものに外ならない。夫々のアプリオリは體驗に於て統一的に實在するものであるけれども、其は唯當爲として實在するに止まり限定的に實現せられたものとは考へることは出来ない。若し實現せられたならば其は最早當爲ではなくなる。當爲として體驗に於て實在するといふことは必然アプリオリの結合が夫々本質的普遍に於て統一せられて未だ限定的に實現せられざるものであり、其限定的結合は唯順次に實現せられ行くものなることを意味しなければならぬ。ライプニッツが永久眞理の對象は可能者であつて、而も其本質は自ら存在に向ふ(D. p. 107)といふのは、正にアプリオリが當爲として其實現に向ふものなることを意味すると解し得られるが併し永久眞理が體驗に於て結合統一せられるといふことは唯當爲として其が凡て純粹事行たる我の主體に統一せられるといふ意味であつて其本質の存在となり、當爲の限定的に實現せられるのは唯事實眞理の結合點に於て對象的事實

として順次過程的にのみ起ることであると考へなければならぬ。ライブニッツは事實眞理を以て神の意志に基くものとし、神は可能なる關係の結合の中から出來得る限り其關係の多くが同時に實現せられるやうな結合を其完全の原理に従つて選擇し、之を現實となすのであると説くこと已に前節に述べた如くであるが、此は即ち永久眞理のアプリオリを當爲として、出來得る限り多く之を同時に結合統一して實現せんとする體驗的自我の意志活動と解し、以て其論理主義的意義を發揮することが出來る。永久眞理のアプリオリは純粹自我の意志のはたらきに由り結合統一せられて一義的に限定せられ、之に由つて現實となる。其結合的限定の如何が即ち事實眞理の意味する所なのである。其故完全が存在の原理であつて、神の意志が、之に従つて事實の世界を創造するといふのは、意志が本來規範に従つて價值を實現せんとするはたらきであつて、永久眞理のアプリオリを當爲として其實現に向ふといふことに、外ならぬ。

此様に解すると同時にライブニッツの神の觀念も亦批判哲學の理想主義に於ける神觀に一致する如く解釋せられることとなる。彼は何處までも基督教の超越神論に従つて、神は其自由の意志に由つて宇宙を創造し、之を超越して存在するものと考

へ、スピノザの汎神論に反對するのであるが、併し彼が已にデカルトと異り神の意志を以て左右する能はざる永久眞理を認め、神の意志は唯其可能を統一的に實現するものであつて、而も實際に於ても完全の原理に従ふものなることを説いた點に於ては、アノノールの語に由つても想像せらるゝ如く正統的基督教の神觀を距ること少くないのであらう。殊に彼は神が一度世界を創造するや其意志に由つて個體に起るべき一切の存在と可能との實在的基礎たる超越的絶對者として存することを説くのであるが、今述べた如く永久眞理はアブリオリの體驗に於て實在し、其統一主體たる神は純粹事行としての自我に外ならず、永久眞理の對象的實現は唯事實眞理に於て過程的に起る外無きものであるとするならば、永久眞理の統一主體としての神も對象としては價值實現の過程に於て存するものとしてのみ思惟せられ、現實世界の外に之を超越して對象的に實在するものと考へるとは出來ない譯である。神は意志の體驗に於て直接に味得せられるけれども、其は對象として思惟せられるのでなく、唯當爲に於て信ぜられるのみである。之を對象として思惟しやうとすれば現實界の外に之を超越して存在するものでなく、唯現實界の内在的基礎となり、同時に其實現の目標となる理念として思惟せられなければならぬ。此場合に神を超越的

といふのは理念として永久真理の完全なる實現の統一的主體と考へられた神が、現實なる價值實現の事實的存在の世界に對して宛も數學の極限概念に相當する位置を占め、永久に接近の對象となるも終に到達せらるゝとなきものであるといふ意味に於て超越的といはれるに止まる。其の關係は無限の全體に對する部分の關係である。對象としては神は即ち此無限なる價值的意志の理念として思惟せられる外ない。ライブニッツも神は無限にして全體として之を知ることとは不可能であると云つて居るが(D. p. 307)此は神が絶對無限の意志として唯部分的にのみ自己を實現するからであると解せられる。現時ヴェンデルバントの説いた所の神も人文の過程たる價值生活に於て實現せられつゝ、其理念に止まる所の一切價値の統一主體といふ如きものであると思はれるが(Windelband, Einleitung in die Philosophie, S. 392)ライブニッツの神は其哲學を論理主義の立場から純化して解釋するとき、正にヴェンデルバントの説く如き神とならなければならぬと思ふ。斯かる意味以外に於て超越的なる神の對象的存在を説くのは形而上學の獨斷説であつて、批判主義の哲學に對し切實なる意味を有するものといふことは出来ない。ライブニッツの觀念本有説に現れた論理主義の精神は之を純化發展するとき、永久真理、事實真理の解釋に於て今まで述べた

如く獨塊派の思想に近きものになると思はれるが其に基く神觀は正にヴァインデルバントが批判哲學の立場から主張する如きものに純化せられて新しき意味を我々に對し有することが出来るであらう。桑木教授は嘗て『ライブニッツの充足理由之原理論に就て』と題する論文(哲學雜誌第三五八號所載)に於てライブニッツが個體の存在を偶然的と解したことは今日のヴァインデルバントの歴史に對する解釋と相呼應するものあることを指摘せられたが、余は個體的事實存在の世界と永久眞理との關係を論理主義的に解釋するならば、ライブニッツの神觀はヴァインデルバントの人文生活と神との關係に關する思想の如きものに至るべきものであると考へる。固よりライブニッツのもとの思想が此の如き方向に發展せらるべきであつたといふのではないが、其哲學を現代に意味あらしむる如き斯かる解釋も其思想の一面を純化發展するとき生じ得べきものであると思ふのである。此神と現實的存在の世界との關係は次節に述ぶる如く、更に神と個體精神との關係に於て一層明にせられるであらう。

五

ライブニッツが神の意志に由つて創造せられたと考へる世界を形成する所の個體

は單純なる實體もモナドであつて、此は表象の一の状態より他の状態に傾動する活動を其屬性とするものである。モナド中其表象が分明にして記憶を有するものは特に精神 *spirit* と呼ばれ、更に其上に必然の永久眞理を認識して自覺と神の認識とを有するものが理性的精神 *intellectus* と稱せられるものであつて、人間の精神は之に外ならない。意志は即ち其が一の表象状態から他の表象状態に移らんとする傾動を意味する。其傾動は已に神の意志に由つて豫め決定せられて居るのであるけれども、併し神は其傾動が強制的に必然なるものにあらずして唯傾向せしむる所の理由を有するに止まる如く之を豫定して居る。其故宛も神が最良なるものに非強制的に而も誤無く導かるゝ如く、人間も亦非強制的に而も誤無く、最も其心を動かすものに從ふといふ意味に於て自由を有して居る(D. p. 261)。而して人間の精神は他の凡ての精神と異り自覺を有するものであるから自ら其自由を知り、永久眞理と神とに對する自己の關係を知つて居らなければならぬ。即ち其は自己の現實なる表象状態が神の意志を充足理由とする永久眞理の結合交叉としての事實眞理に對當するものであつて、唯之を「自己の視點に從つて表象するもの、其表象の推移は神の意志に由つて非強制的に豫定せられて居ることを知るのである。凡てのモナドは神が其の意

志に由つて永久眞理の一義的限定結合として生ずる事實存在の世界を表象するのであるから、其表象内容は同一であつて、唯其視點を異にするのみであるが、人間の精神は今述べた如く自己の視點より最も分明に自覺的に之を表象するのである、個々のモナドは何れも、宇宙の生ける鏡であるが、人間の精神は常に生ける鏡たるのみならず、神の似姿であつて、神の事業の知覺を有するのみならず、小規模なりとはいへに似たるものを産出する力を有するのである(D. p. 305)。宇宙は神を主宰とし、人間精神以下凡てのモナドが其表象の度の比較的完全なるものより不完全なるものに至るまで順次に排列せられた神の國に外ならぬ。

今此説を前節に述べた神と世界との關係の解釋に照して考へると、曩にも云つたやうに現實の世界は當爲として體驗せられる永久眞理のアブリオリが純粹事行たる絶對意志に由つて限定的に結合せられたものであつて、此意志の實現の外に對象としての神を求めることは出來ないのであるが、個人精神といふのは此意志體驗を反省して自我の中心に於ける統一を限定、對象化したものに外ならない。體驗其物は未だ何等對象としての限定を含まないものであるから、其は絶對的であつて超個人的といはなければならぬことフイヒテの純粹自我に於ける如くである。我々は此

體驗に於て純粹自我の絕對意志に參するのであつて、之を或は當爲に従つてはたらく意志の體驗に於て、我々人間は絕對者の裡に生きるといふことが出来る。ウィンドムバントも價值生活に於て我々は神の裡に生きるのであると云つて居るが (Windelband, Op. cit. S. 392) 批判哲學の立場から見れば實に此價値の實現に向ふ當爲に従つてはたらく意志の體驗より外に神に於ける生活といふべきものはあり得ない。偕此體驗は今述べた如く其自身に於ては個人的といふ限定を有せざる超個人的普遍のものであるが、併し其普遍的といふのは *essence* に然るのみに止まり、反省すれば個人的と規定せらるべき我の中心に統一せられて居るのである。自我も反省の對象としては現實的對象界の一員と考へられなければならぬ。併し此様に自我を對象として個人的自我と思惟することは更に之を當爲の結合點として限定する統一主體としての普遍的自我の背景に於て出来るのであつて、其背後には未だ限定せられない普遍的自我が無ければならない。此普遍的自我は一度自我を自己に對する對象とし、再び之を自己に攝取するものとしてのみ思惟せられる。眞の普遍的自我は單に體驗的自我の如く如何にしても對象化することが出来ないといふばかりでなく、對象を自己に攝取する此普遍的自我でなければならぬ。批判哲學の立場から

客觀界構成の主觀と認められる意識一般先驗的自我はリッカートの明にした如く唯
 限界概念に止まるものであるが、此は理念として今述べた如き普遍的自我と思惟せ
 られる。之こそ眞に *an und für sich* に普遍的超個人的なる自我といふべきものであ
 つて、之を凡ての價值實現の主體として考へれば理念としての神に歸するのである。
 個人的自我は體験的自我と此普遍的自我との間の *für sich* の段階に於て定立せられ
 るのである。我々は自己の體験に於て凡てのアブリオリの主體としての絶對意志
 に參し、其精神は夫々の立場から此等のアブリオリの統一的實現の主體としての普
 遍的自我の理念或は神の理念を部分的に實現するのである。此意味に於て我々の
 精神は神の精神の一部に外ならない。ライプニッツが人間の理性は神の似姿であつ
 て、小規模とはいへ神の事業に似たるものを實現するといふのは此意味に解するこ
 とが出来ぬ。併し我々が凡ての價值を實現し盡して自ら神となることは勿論出来
 ない。單に認識の範圍にのみ就いていふも、凡ての事實眞理が知り盡し得られざる
 ことは勿論なるのみならず、純粹のアブリオリたる數理や空間に關する永久眞理と
 雖も全體としては知られるものでないのであつて、此等の眞理を知り盡し、凡ての價
 値を實現して神となるといふことは有限なるものに許されざる所なのである。神

は此意味に於て超越的である。其超越的とは世界の外に對象として存在するといふ意味でなくして、部分たる現實世界に於て實現し盡されざる價値の全體の統一として現實存在の世界を超越するといふ意味に外ならない。

右の如く我々の理性が神の一部分であつて、個人の自我は普遍的絶對自我の部分に外ならないといふのは、個人の理性的自我を集積したものが神の絶對自我となるといふ意味では勿論無い。凡て精神的なるものの特徴は部分の總和に由つて全體が成立するのでなく、部分に先だつて全體が實在し、部分に全體の中に於て其限定としてのみ考へられるとに存する。其故全體と部分との關係は外延量的に思惟すべからずして唯内包量的にのみ思惟せらるべきものなのである。而して外延量的全體は其が全體として思惟せられる限り有限であつて、之を無限ならしめんとすれば唯不定なる可能的無限たることを得るに止まり、眞の現實的無限として思惟するとは出来ないのに對し、眞の無限は唯内包量的全體にのみ可能である。其部分といふのは全體に先だつて存在し、其總和に由つて全體を成す如きものでなく、全體の自己限定として考へられたものに外ならぬ。今個人の理性が神の絶對自我の部分であるといふのは神が自己を制限して部分的に現れたものが、個人の理性であるといふ意

味であつて個人の理性を集積したものが神であるといふ意味ではない。無限なる神の部分として個人の心も無限に多くあるから、之を集積して其全體を考へるといふことは出来ない。唯全體としての神の限定として個々の精神が其部分と考へられるのである。併しながら無限なるものに於ては部分が全體を表現しなければならぬ。ロイスの所謂自己表現體系を成すのが無限の特徴である。無限の神の部分としては個人の理性が全體たる神を表現しなければならぬ。ライブニッツが人間の理性を以て神の似姿とし、神を表現することを其特權としたのも正に之に相當する。神は到る處に中心あつて何處にも周なき圓であるといふのも (L. 25) 亦之に由つて解することが出来る。我々の體驗は同一なる當爲を結合するものであつて、其當爲の實現たる客觀的價值が所謂普遍妥當性を有するといふことは、本來其當爲の同一なることを含蓄しなければならぬものであるから、個々の個人の體驗内容は之を其要素たる永久眞理のアプリオリに分ちて考へれば全く同一なるものであつて、唯其限定結合の仕方が異り、而して其等が過程的に推移する爲めに事實上相違するに過ぎないと考へなければならぬ。是れライブニッツが凡ての精神の表象内容は同一であつて唯其分明の度を異にするに止まり、極微知覺まで併せ考へ

るならば全く同一の表象内容を有するといふことの意味である。若し彼の極微知覺なるものを形而上的の意味を離れて唯妥當なるアプリオリの可能的結合を意味するものと解するならば、其主張は論理主義の立場から正當と認めなければならぬ。此様な極微知覺としては個々の人間理性が何れも神の表象内容たる凡ての永久真理の凡ての可能的結合を含蓄するから、個人の理性が部分として全體たる神を表現することが出来るのであつて、正に神の無限性が此處に現れて居る。其部分といふのは、今述べた内包量的部分として表象の分明の度(Grad)の制限に基かなければならぬ所以も亦理解せられる。ライプニッツの『モナド論』に於て説く所は斯く解して論理主義の立場からも充分批判的の意味を賦與することが出来るであらう。此様に人間精神の相違を表象の分明の度にとし、之を何れも神の精神の部分的制限であると解するならば、下つて人間理性以下の精神或は凡てのモナドにも亦同一表象内容を與へ、唯其表象の分明の度が非常に低いものと見ることも必ずしも獨斷的なる形而上學說とのみ貶し去ることは出来ない。物質的なる物體も凡ライプニッツの如く精神的なるモナド實體の現れであることとは無意味なことではな
いと思ふ。古くはロツェの形而上學より新しくはリップスが其 Naturphilosophie の論文に

於て終に達した世界觀に至るまで、充分自然科学を顧慮する形而上學が多くライブニッツのモナド論に近いものとなつて居るのは注意すべきことである。實際ライブニッツが物體の本質をデカルトに反對して延長にありとせず、作用或は力にありとし而して之を原子論的に考へて力的原子論を唱へたのは (Letter on the question whether the essence of body consists in extension, D., p. 42—46; The Principles of Nature and of Grace, D., p. 299; Monology, §. 1—3; Discourse, 12 M., p. 18—19) 今日のエネルギイ量子論の如きものと甚だよく一致する所があるのであつて、更に之を我々の精神生活の内的事實に由つて解釋するならば、其世界觀はモナド論に最も近きものとなるのは自然のことと思はれる。ライブニッツのモナド論は今日形而上學的世界觀を建てんとするものにとつて古來の哲學中最も有力なる指針を與へるものたること否定出來ないであらう。今余は前述の如き批判哲學の立場から計される限りの形而上學的構想に觸れるのみであつて、所謂世界觀の建設を試みるのではないから、此問題に深く立入ることとはしないが、とにかくライブニッツの精神的實體説が論理上不可能ならざるものなることは認め得ると思ふ。斯くて宇宙は無限に多くのモナドより成り、其は何れも同一アブリオリの凡ての可能的結合の主體としての神の一部であり、同一内容を連

續的に推移する種々の分明の度に於て表象するものであると解し、而も神を斯様に内在的に解することに由つてロツツエやリップスも試みた如く、多元的宇宙に一元的統一を與へることが出来ると思ふ。其の何故に本來絶對完全の價値主體たる神が自己を制限して多數の個體に部分的に現れるかは、ヴァインデルバントも現實に於ける價値の二元性に就いて其説明すべからざることを認めた如く (Windelband, Op. cit., S. 431—432) 説明を絶することである。絶對自由の意志たる神の活動を知識の立場から規定し盡す能はざることは固より當然の事と斷念しなければならぬ。唯絶對完全の神が制限的のみ實現せられるといふことは個體存在の條件なのであつて、之無しには個體存在の世界は不可能であるといふことは認めなければならぬ (Monadology, §. 42. D., p. 314)。我々は自己の存在を認めると共に必然其制限をも承認することを要する。併しながら此我々の存在する現實の世界は部分的と雖も神の完全性の實現せられる世界である。我々の意志生活は制限的ではあるけれども絶對價値を實現する生活である。此處に此世界と我々の生活との光榮がある。此世界が神の最良なるものに向ふ意志の創造たる所以も之を措いて外には無い。ライブニッツは個體を以て絶えず神より流出(emanate)するものであると云つて居るが(D., p. 110; M., p.

(23: 25) 併し此流出といふのは普通に所謂流出説の模範と認められる新プラトーン派に於ける如く唯神の本質の無意的なる流出ではなく、神の意志による創造を意味するものたることは彼の哲學から見て疑も無いことであつて、唯此個體的存在の世界が宛も流出説に於ける如く絶對完全の神の本質の部分的發現たることを表はす爲めに流出の語を用ゐたのであらう。之を神が凡ての價値實現の統一的主體たる理念であつて現實の世界は之を部分的に實現するものであると解するならば、ライブニッツの最良觀は批判哲學の理想主義に轉釋することが、出來やう。ライブニッツ哲學は哲學史上普通に獨斷論の模範的なるものと目せられて居るけれども、實は其認識論より宇宙觀、人生觀に至るまで、今日の理想主義的批判哲學の精神に由つて生ける意味を與へ得べき甚だ多くのものを含み、我々に對し非常に切實なる意義を發揮することの出来るものであると思はれる。若し其一端なりとも此小篇に由つて示された所があるならば余の幸之に過ぐるものは無い。